保育の物語と保育者の実践知

―1歳児クラスの保育エピソードに見られる保育士と子どもの対話から実践知を探る―

芦澤 清音

帝京大学教育学部初等教育学科　〒 192-0395　八王子市大塚 359 番

要　約

本研究は、1歳児クラスの保育エピソードに記述された保育士と子どもの対話から保育士の実践知を探求する試みである。自我が拡大し、生活の主体として大人や仲間との関係を築いていく1歳児の1年間の日誌に記されたエピソード 249 個を、新年度の姿、遊び、食事、午睡、保育士と子どもの関わりの5場面に分け、その中で保育士と子どもの対話的関係が豊かに含まれるエピソード 23 個を選びだし検討を行った。その結果、子どもと保育士、あるいは、子ども同士のかかわりや遊びが豊かに展開するとき、保育者がそのきっかけを創りだしていることが明らかになった。きっかけをとらえる「ひらめき」の瞬間を、保育士は「そこで」という言葉で表現していた。「ひらめき」の瞬間には、遊びをダイナミックに広げる、子ども同士の関係を調整する、子どもの気持ちを変える、という3つのパターンが認められた。午睡と食事の場面からは、保育士の柔軟性が子どもの対話を広げるポイントになっていることが明らかになった。また、保育士に一貫しているのが、子どもとの対話を楽しみ、常に保育の場をより楽しいものにしようとする姿勢であった。実践知としての保育の「ひらめき」は、保育士の保育を楽しむ姿勢と柔軟性を土台にして生まれてくるものと考えられた。

キーワード：1歳児、保育エピソード、実践知、物語、対話

1. はじめに

以下は、1歳児クラスの担任が日誌に記したある日のエピソードである。

「子どもたちだけで解決！！」　12 月○日
夕方ホールで遊んでいると、カホちゃんとスズちゃんが場所の取り合いでぶつかりスズちゃんが叩いてしまう。「イタ～イ」と大声で泣いてアピールするカホちゃん。おとなの方を気にしながら色々感じているスズちゃんがその場で立って考えている様子。すると大泣きの声にアカネちゃん、リンちゃん、アヤちゃんが心配して「どうしたの？痛かったの？」「痛かったよ！って言いに行く？」と聞いている。カホちゃんがうなずいて「いたいよ！」と言うとアカネちゃんが「言えたね！」とまるでおとなのように声をかけていた。おとなはずっと側にいたが、何も言わなくても子どもたちのやり取りでカホちゃんの気持ちは落ち着いた。みんなに責められてしまったスズちゃんは無言でその場からいなくなるが、彼女なりに色々と感じただろうと思い、あとでそっと「スズちゃんもやりたかったの？」「嫌だったもんね」と気持ちを受け止めた。スズちゃんはその後スッキリ遊んでいたが、どう感じただろうか。でも子どもたちだけで、言葉でこんなにも解決してしまうやりとりに驚くと共におとなの言葉もよく聞いているなと思った。

このエピソードは、1歳児クラスが始まって8か月余りが過ぎた年末の子ども同士のやりとりの場面である。保育士の“おとなの言葉もよく聞いているなと思った”という記述から、泣いている子を心配して集まってきた子どもたちのやり取りは、保育士と子どもの普段のやりとりを再現しているのであろう。

1歳児は、乳児期から幼児期前期へ移行する時期にあり、自我の拡大、表象の成立などにともなって、生活の主体者として人生を歩み始める。自分とは違う友達の存在を意識し、大人との関係を支えに、ともに生活する仲間として親愛の気持ちを示し共感しながら一人ひとりを認識するようになる（布施 2006）。冒頭のエピソードは、まさに、その共感的な仲間とのかかわりの場面である。保育現場には、このようなほほえましい場面や感動的な場面、あるいは、心を痛めるような場面が日々無数に繰り広げられる。保育士の記憶に深く刻まれるものも

あるが、多くは少しの間記憶にとどまって消えていく。

近年、子どもとの関わりの中で、保育士が心を揺さぶられ、記憶にとどめておきたいと思う場面をエピソードとして記述することへの関心が高まり、保育士が保育を省察するときの資料として使用されることが増えてきた（鯨岡 2007）。エピソードは、保育士自身の体験であり、そこに描かれるのは、保育士から見た子どもの世界であり、子どもとの対話である（鯨岡 2012）。保育士の想いや保育観に彩られた保育士の物語といえよう。なぜなら、そこには、やまだ〈2000〉が物語と呼ぶ、日々の出来事を秩序づけ、「経験」として組織し、それを意味づけていくという一連の行為があるからである。従って、保育のエピソードには、保育士の経験に支えられた実践知がちりばめられていると考えられる。

本研究は、保育士の物語として描かれたエピソードから、保育士の実践知を読み取る試みである。

ところで、読み手がひきつけられるエピソードには、その中に子どもとの対話が豊かに描かれている。加藤（2007）によると、子どもとの「対話」は、保育士が子どものことを「意味を作り出す主体」としてとらえることから開始される。そして、子どもたちの作り出す「意味」の世界を受け止め、保育士の思いを子どもたちに伝えて行く関係を「対話的関係」と呼んでいる。読み手は、加藤の言う「対話的関係」が豊かに展開されるエピソードに感動を覚え、保育士と子どもの生き生きとした世界を楽しむことができるのであろう。

このような対話的関係が豊かに描かれたエピソードの中にこそ子どもの育ちを支援する保育士の実践知を見出しうると考えられる。

これまでの保育の実践知に関する研究は、保育の特定の場面における保育士の語りから実践知を明らかにするものなどがあるが（砂上他 2012）、それらは幼児期を対象としている。また、1 歳児の研究は、主に保育場面の観察によるもので（河原 2004、斎藤 2012）、保育士の見方や思いに焦点をあてるものはほとんどない。古賀（2011）の研究は、保育士の意識に焦点をあてたものであるが、1 歳児保育の困難を明らかにしようとしたものである、

本研究は、保育の豊かさに注目し、保育士が記述する 1 歳児の日誌のエピソードのなかで保育士が心を動かされ、保育士と子どもの対話関係が生き生きと描かれたエピソードを対象とし、保育士の物語の中に読み取れる実践知を明らかにしていく試みである。

尚、本文で使用している子ども及び保育士の名前は仮名である。

2. 研究方法

(1) 日誌の保育エピソード

神奈川県内にある X 保育園では、保育日誌に一日の保育および子どもの様子と併せて、その日一番印象に残った保育エピソードを書いている。1 歳児クラスの日誌は、表面にクラス全体の子どもの一日の様子を記入する欄と保育のエピソードを記入する欄があり裏面の上部まで続いている。裏面は、子どもの個人別記録欄である。以下が 1 歳児クラスの日誌の様式である。

エピソード欄には、その日に記録を担当する保育士が印象に残った出来事を書くのだが、事実を観察記録とし

て書くだけではなく、子どもの想い、保育士の想いを織り込み、最後に考察を入れ、エピソードのタイトルを付ける。そのことで、保育士のとりあげた場面は、保育士の子どものとらえ方、保育の視点、保育観が反映したものとなる。言い換えると、保育士の想いが込められたエピソードとなる。これらは、日常的に担任間で共有されるのはもちろん、様々な保育の振り返りの機会に活用される。たとえば、月案の作成時、学期ごとの保育計画を立てる際のカリキュラム会議、半期ごとの園全体の振り返り会議、及び、隔月に開かれる気になる子のケース検討会の際に、担任が作成する資料の一部となり、担任が振り返るだけでなく、園内の職員全員が子どもたちのリアルの姿を共有できる重要な資料となっている。

Ｘ保育園では、2006 年度よりこのようなエピソード記録を開始した。その背景は、日々流れていく子どもたちの生き生きとした場面を記録しておきたいという保育士の願いによるものであったが、結果として、上述のような保育の省察の貴重な資料となり、日常の子どものリアルな姿をイメージしながら園全体で子どもの姿を共有できるようになった。

(2) クラスの構成と子どもたちの姿

１歳児クラスは、男児５名女児 11 名の計 16 名に対し、担任は４名で、内２名が０歳児クラスからの継続担任である。低月齢児と高月齢児がほぼ半々であるが、女児が多いこともあり、比較的発達の早い子どもが多く、１歳児クラスからごっこ遊びなどのイメージ遊びが活発に展開していた。その一方で、自我が育ち始めた子どもたちの間でかみつきが頻繁に起こり、保育士は一時も目を離せず、気の抜けない日々が相当期間続いていた。日誌のエピソードは、そのような状況の中で書かれたものである。

(3) 分析資料

201x 年度の１歳児クラスの日誌に記述されている保育エピソードとそれに対する保育士の語りを分析対象とした。

保育エピソード：201x 年４月１日から翌年３月 31 日までの 249 の記録を分析対象とした。

保育士の語り：2013 年の７月に当時の１歳児クラスの担任保育士２名と翌年の２歳児クラス及びその翌年の３歳児クラスで対象の子どもたちを担任した保育士１名、及び、園長が一堂に会した。保育士らは、各自が事前に保育エピソードを読み直した上で、それぞれが印象に残っているエピソードを挙げながら、そのときの想いや当時のクラスの様子などを自由に語った。筆者も同席し、園長と担任らの許可をとり、録音し、その後、プロトコルに書き起こした。これらの語りは、保育士がそのエピソードを選んで日誌に書いた背景を理解するための資料として分析に追加した。

保育士が語ったエピソードは、保育士と子ども、子ども同士のかかわりが豊かに描かれているもの、あるいは、子ども同士のほほえましい関わりが描かれているもの、子どもの成長が読み取れる内容のものであった。すべてのエピソードに豊かな対話が含まれていた。

(4) 分析の視点

249 のエピソードは、遊び、食事、午睡、関わり（保育士と子ども、あるいは、子ども同士）の場面に分けられた。それぞれの場面の中から、保育士の視点を参考に、子どもと保育士の対話が特に豊かに展開されているエピソードを選び、さらに子ども達の変化がわかるように、新年度に特徴的なエピソードを加えて、全部で 23 個のエピソードを選び出し、詳細に分析した。具体的には、５つの場面ごとのエピソードの特徴を整理し、全体を通して共通に見られる保育士の視点を実践知として考察した。

3. 結果と考案

場面ごとの具体的な内容についてその特徴を整理し、考察した。

(1) 新学期の様子；新しい環境に慣れていくまで

新入園児４名が加わり、ミツバチぐみがスタートする。保育室が変わり、２名の新しい保育士が加わって、新しいクラスの１年の始まりである。

表１は、子どもたちが入園あるいは、進級して１か月間の様子である。

４月４日に新入園児がそろい、担任は一人ひとりに寄り添いながら、部屋が安心できる場所（４月６日）となるように生活のリズムをつくり、環境を整えようと取り組んでいる。

一方で、４月５日のエピソードでは、９人の子どもたちが集まって「あくび」の絵本の読み聞かせを楽しんでいる。保育士が「わぁ～」とあくびをすると、子どもたちも次々に大きな口をあけてあくびのまねをし、子どもの間に楽しさが広がり共有される。加藤（2012）が言う、模倣と同調が共感の根っこになっていくことを実感させてくれる場面である。

子どもの要求から始まった絵本読みは、保育士の機転で集団の読み聞かせの活動となっていく。子どもの要求

表１　新学期の姿（新しい環境のもとで）

4月4日	〈新みつばちスタート！！〉 今日から新入園児も保育園での生活が始まった。7：30すぎにオサムくん、カレンさんが登園する。この２人は保育経験もあり、部屋に入ると母父から離れて遊び出す。オサムくんは表情が硬く、“ここはどこだろう？”と不安も感じるようだったが、ボールや電車を渡すと遊びだした。カレンさんはマイペースに笑顔を見せ、おもちゃの取り合いでも“私の！”と強く主張したり、“抱っこして～！”と甘えたり、自分の気持ちを存分に出している。カイさんは、保育経験がなく、母との別れでは大泣きするが、落ち着くと朝おやつも食べ、庭に出ると砂場でよく遊び、昼ご飯をよく食べた。モトコさんは、庭でもマイペースで遊んでいたが、母がいないことに気付き、眠さもあって泣き出す。少し寝ると庭で遊びだしたが、部屋へ入るとまた泣けてしまう。それでも好きな白ごはんは完食できた。カズキくんは、食べることが大好きで、入室時に泣いてしまうが、ごはんで気が変わり、食後はマイペースによく遊んでいた。
4月5日	〈あくび〉 昨日、絵本の「あくび」を何度も読んだので、子ども達も覚えたようで、今日も「読んで～」と持ってくる。読んでいると次々に子ども達が集まり「わぁ～」とあくびのところで大きな口を開けている。そこでみんなで見ようと、椅子に子ども達を集めると、9人近く集まり、みんなで楽しんだ。新入園児のカレンさんも覚えて嬉しそうに大きな口を開けてあくびの真似をしている。みんなで一冊の絵本を楽しめる朝のホッとした良い時間だった。
4月6日	〈お部屋が安心できる場所〉 「まずは生活の拠点となる室内になれよう！！」というスタンスで、今日はモトコさん、カズキくん、マサトくんが最初から室内。そうして10：20～はカイさん、カレンさんも入室。やはり予感的中。園庭では砂場から動くことのできない彼らが、室内ではタオルを広げたり、ジャンピングカートレインをしたり、ボールを転がしたり、水道をさわってみたり…自ら動く姿が見られた。面談の際に「外が好きだから…」と話されていて、「外へ行けばおちつくぞ！」と思っていた私たち。でも、まずは朝登園しておやつを食べ、少しなじんだ空間で過ごすこと。そこから少しずつ「探検してみよう！」という気持ちが芽生えていくよう、彼らの暮らしを組み立てていきたい。
4月21日	〈大笑いのユイさん〉 三輪車から降りられずに困って泣いていたユイさん。そこから気分が落ち込み遊びに誘っても冴えない表情だった。そこへやってきたアキラくんに島津（担任）がイチゴケーキを作って食べ「すっぱ～い！」と言うとアキラくんも「すっぱ～い！」とオーバーリアクションをする。その姿にユイさんが手を叩いて大笑いする。何度もする姿に指差して笑うほどで、まるで大人が笑っているかのようだった。こんな風に友だちの姿ややりとりで気分が変わることも多くなるのだろうなと感じ、サラリと気分転換できていいなと思った。
4月26日	〈友だちの姿〉 ユイさんが今日も午前中からご機嫌ななめ。だっこをしているうちにウトウト…疲れているのだろうな～なんだか一年前の慣らし保育の時と似ているな～懐かしいな～と思いながら、そのまましばらく過ごした。早めに入室をしようと思い、部屋へ移動。テラスに戻ると目が覚め、着替えをし少し寝たからかにっこりしながら先に入室。ところがそこに内田さん（栄養士）が食事の手伝いで部屋に来てくれ、ユイさんはびっくり！再び涙。わたしも急いでカホさんとスズさんの着替えをし一緒に入室することに。「ゆいちゃん、かほちゃんもすずちゃんもご飯食べるって。一緒だね。今日はなんだろうね。その前にお手手ふこうね」などと話しながらテーブルに誘っていると、隣に座ったカホさんが「タオル？お鼻？ふんっ！」とユイさんに話しかけてくれた。するとユイさんも気分が変わり、「んっ？」と返す。「おっ！これは気分がかわったぞ」と感じた私は「ゆいちゃん、かほちゃんとエプロンつけて待っててくれる？」と聞く。「うん！」と頷くユイさん。スズさんも合流。3人で「タオル！」「カエル！」「ふんっ！」とおしゃべりに花が咲いていた。その後、昼寝前にもユイさんは少し「え～ん…」と弱気になるものの、そこへ再びカホさんがカエルのおもちゃを持ってユイさんの布団へやって来てくれ、ユイさんも気分がまぎれたようだった。大人の支えや見守るまなざしも大切だし必要だが、こうして少しづつ友だちの姿も安心できるものとなっていくのかな…ととても嬉しく微笑ましく思った。

に沿った個別のやりとりを保育士は集団のやりとり遊びへと広げていくのである。こうして、子どもたちが一緒にいることが楽しいという経験を重ねるような保育が新年度当初から行われている。

また、保育士の“ホッとした良い時間”という記述からは、新年度の慌ただしさが読み取れるが、その緊張感や多忙感のなかでの心地良い時間を子どもとともに過ごす喜びが伝わってくる。こうして、保育士と子どもの心

地よい物語が紡がれていくのであろう。

4 月 21 日、26 日は、2、3 週間たち、新しい環境に徐々になれてきた子どもたちの姿である。21 日は、担任と子どもの楽しいやり取りを見て、泣いていた女の子は気分を一新し、大笑いするエピソードである。日々の子どもと保育士のやり取りから生まれる雰囲気は周囲に伝わっていく。楽しいやりとりから生まれる 2 者間の空気は、周囲の子どもたちにすぐに伝わり、楽しさの輪が広がる。

26 日は、保育士が女の子に個別に寄り添う場面から始まり、その後、他の子どもたちとのかかわりの中で気持ちを立て直していく。一緒にいることで気持ちが変わり、楽しくなっていくような子ども同士の関係が築かれ始めており、保育士もそれに気付き、子どもの力を借りながら保育を進めている。

(2) 午睡と食事における保育士の関わり

食事と睡眠は、生活の基本であり、子どもの成長と情緒の安定にかかせないものである。楽しい食事と心地よい睡眠を保障するために、保育士は子どもにどのようにかかわり、対話がうまれ、展開していくのだろうか。

表 2 の 6 月 14 日の〈すごーい！〉は、新しいクラスが始まり 2 か月余りがたち、言葉が増え、できることが急速に増えてきた子どもたちの食事場面でのやり取りである。スプーンを上手に使えるようになった子どもの姿を見て思わず発した保育士の「すごーい」の一言が、子どもたちに伝わっていく。子どもたちは、大きな口をあけて、たくさん食べることが「すごーい」ことだと受け取り、次々に、苦手な食べ物にもチャレンジする。保育士の肯定的な反応が、子どもの意欲と他児への関心を高めている。その姿をほほえましく思う保育士のまなざしがある。

9 月 15 日の味見のエピソードでは、保育士がおかずを皿に入れて配膳するときに、自分の手のひらに少しとって食べて見せた「味見」を、子どもたちの「ちょうだーい」のリクエストに応じて、手のひらにのせてやり、みんなで「味見」を楽しんだエピソードである。保育士が、食べ方より楽しく食べる経験を大事にしていることがわかる。また、つまみ食いのちょっとしたいたずら心、ちょっとした特別感から生まれるわくわくした気持ちを子どもと共有し、保育士自身もわくわく感を楽しんでいる。

10 月 28 日のエピソードでは、保育士の一方的な誘いを子どもは拒否し続けるが、そこに別の子どもが入り、2 者の向き合う関係から 3 者の関係になることで、ゆとりが生まれ子どもの気分が変わる。保育士は、このエピ

表２　食事の場面

6 月 14 日	〈すごーい！〉 お昼ごはんにカホちゃんが、ユイちゃんが自分で上手にスプーンですくって大きな口を空けて食べる姿を見て「すごーい！」という言葉が思わず出てきた。みんなですごいねと話していると「ピカピカよ！」とアピールするカホちゃん。その姿に今度はユイちゃんが「すごーい！」と言っていた。そんなやりとりを聞いていたイチロウくん、アカリちゃんも野菜に手を伸ばして食べ得意顔になっていた。少しずつ余裕が出てきた食卓では、ごはんのメニューの話や「おいしいね！」と子ども同士が言い合ったり、楽しい食卓になっている。楽しい雰囲気の中で食事をすると子どもたちもゆったり食べられてとても良いなと感じた。
9 月 15 日	〈味見っておいしい！〉 今日の食卓のメンバーはリンさん、マサトくん、スズさん、カズキくんの 4 名。お皿におかずを配膳する時に、ナスときゅうりの浅漬けをおとなが「ちょっと味見してみるね」と手に載せて食べてみた。すると「ちょうだーい！」と言うので、手の平に載せると嫌がることなく次々と口にする子どもたち。気分やメニューによって食べむらのあるカズキくんも手を出して「おいしー！」と食べている。「もっとー！」と 2 回ほどあげて「じゃあお皿に入れておくから」とお皿で渡した。お皿のはどうかな？と見ていると、それも指でつまんで美味しそうに食べていた。マサトくんは皿に載せるとナスは避けてきゅうりを選んで食べていたが、とてもおいしそう。「ちょっと味見！」で自分から食べてみようかな？と思えるきっかけになったなと感じた。楽しく食事ができたかな？
10 月 28 日	〈食べなよ〉 昼食で先におかず、味噌汁、そしてマーボー豆腐の順によそって配った。みんな配られたものから食べていくのだが、チヒロさんだけは食べたいものがないのでひたすらマーボー豆腐がくるのを待っている。おかずも食べて欲しいので「食べて待ってて」と言っても“嫌”里芋を小さくしてスプーンに乗せると“これじゃないのよ”とプリプリ。「食べなよ」と言っても“イヤイヤ”。すると隣に座っていたカイさんが「食べなよ」とおとなの真似をしてチヒロさんにおかずをすすめた。するとなんと食べた！おいしかったようで全部食べていて、おとなが言うよりも子ども同士の方がその気になるのだなと思った。

表３　午睡の場面

7月27日	〈リンさんと睡眠〉 毎日寝るのが13時近くのリンさん。「○○さんトントンしてよ！」とその日によっておとなを選んでいる。たまに寝たくなかったり、みんなが寝てしまった雰囲気に不安になるのか「ママ‥」と寂しさをアピールする。おしゃべりしているとふっと気分も変わるリンさんに、色々と話しておしゃべりを楽しむ。自分の布団の絵柄の月の絵を見て「すべり台みたいだね」とつぶやく。「本当だね。お外行ったらやろうか」と話していると「タイヤがあるから‥」と階段にタイヤがあるとできないことも話してくれた。そうやって話しているうちにウトウトして入眠してしまった。0歳の時から入眠前に不安になるときがたまにある。おしゃべりを楽しみながら寝る時間もいいなと思い大切にしたい。
10月12日	〈最近の睡眠の様子〉 先月よりぐっと落ち着いてきた子どもたちの姿は睡眠の時間も少しずつ変わってきたなと感じる。今日は11時半まで遊ぶとごはんを食べた後はお腹も満たされてウトウトするオサムくん。アヤカちゃんは「トントンしないで～」と布団の中にもぐり込んでカホちゃんとおしゃべりしながらお互いの声を聞いて笑い合っている。アカリちゃん、カエラちゃん、リンちゃんは、それぞれ布団に座って三人でおしゃべり。何度も楽しみおとなが「小さい声でいい？！」と聞くと「ちっちゃく?! エへへ～」と余裕の表情。ようやく12：40からその三人のトントンへつくとおしゃべりしながら心地良くスーッと寝てしまった。少しずつ寝るまでの時間もそれぞれが心地良く過ごせる時間になり、満足して眠くなり、寝ているなと感じる。「しーさんがいい！」と強く求める子も最近はほとんどいない。他のおとなとの関係が出来、その時子どもが求めるおとなと一緒に寝ている。 16人全員揃うとどうだろうか？明日の子どもたちの体調はどうだろうか？日によって違うけれど、おとなの余裕は常に持って関わっていきたい。

ソードを大人と子どもという縦の関係より、横のつながりによって子どもの気持ちが解きほぐされるのだと解釈し、子ども同士のつながりの重要性を確認している。この保育士の意味づけは、子ども同士の関係ができてきたことを日々の保育の中で実感していることから生まれてきたのであろう。

表3午睡の場面の7月27日のエピソードでは、子どもが保育士とおしゃべりをしながら、次第に気持ちが落ち着き眠りに落ちていく様子が書かれている。保育士の「おしゃべりを楽しみながら寝る時間もいいな」という記述から、寝かしつけるという意識ではなく、眠りにつくまでの時間を子どもと一対一でゆったりと過ごし、子どもが心地良く入眠することを大事にする保育士の姿勢が読み取れる。

このエピソードについて、他の担任は、話し合いの中で次のように語っている。

「しーさん（担任）、子どもたちとおしゃべりしながら寝るっていうのが多いよね。いいな～って思っていて。ついつい絵本読んで終わり、『さあ寝ましょ』っていう風になるけど、『今日の～楽しかったよね』とか、子どもが気持ちよくなるような話をする。子どもは、きっと寝かされるという圧力を感じないで安心できると思う。○○だったよねって、思い返しながら気持ちよくなる流れなんだろうなって。私もまねさせてもらっている。」

午睡時の保育士と子どものおしゃべりの様子が述べられている。子どもは、保育士が心地よい体験として語ってくれる午前の出来事をともに振り返り、保育士に見守られている安心感の中で眠りにつくのである。保育士のおしゃべりは、子どもと保育士の物語として、子どもと保育士のなかにも浸透していくのであろう。

10月12日のエピソードは、子ども同士で、おしゃべりをしながら徐々に眠りについていく場面である。ここでは、午睡時の小声でのおしゃべりの時間が保障されていることがわかる。園の生活のルールに従うと、子どもは、午睡の時間という区切られた時間に眠ることが期待されているわけだが、それが、必ずしも子どものリズムに合っているとは限らない。寝る時間だから寝るというのは、実は、大人の都合が優先されていることがある。ミツバチぐみでは、あくまでも子どものリズムが大事にされ、午睡が心地良い経験となるように、入眠までのゆったりとした時間が保障されている。

(3) 保育士が遊びのきっかけを作る

遊びは、食事、午睡とともに1歳児クラスの生活の中心である。安定した環境と安心できる人との関係のなかで、子どもは存分に遊ぶことができる。自我が芽生え、生活の主体者として進み始めた子どもたちの遊びの場面に保育士はどのように関わっていくのだろうか。表4は、保育士の些細な関わりが、遊びをつくりだすエピードである。

日々の生活の何気ない場面をとらえて、保育士が遊びにつなげていく様子を知ることができる。

表４　遊び：保育者がきっかけを作る

5 月 18 日	〈おくすりごっこ〉 昨夕ホールでユイさんが転んでしまった時にピーポーピーポーと駆け寄りブロックで作った薬を飲ませると元気になり、大笑い。そのやりとりが楽しかったようでわざと倒れて泣き真似をしてはカエラさんとアヤカさんに薬を飲ませてもらうのを繰り返していた。部屋に帰ってからも続いた。そして今朝も倒れてエーンとアピール。カエラさんは何かを探している様子。そこで茶碗にお手玉を入れて渡すとユイさんの元へいって渡すカエラさん。ユイさんも元気になる。昨日した遊びを覚えていて今日もまた楽しんでいた２人。楽しい遊び、記憶って残るんだなと思った。楽しいこといっぱいしたいなと２人の笑顔を見ていて思った。
6 月 16 日	〈お立ち台で大盛り上がり〉 この頃、ユイさんを中心に子どもたちだけで手遊びを始める姿があり、今朝はたまたま正方形の牛乳パックの台を見つけたユイさんが上に立ち「てをたたきましょ～♪」と歌っていた。カホさんもやりたそうにしていたので、お立ち台を次々出すと子どもたちが集まってきて参加する。そこで、おとながリードして「手を叩きましょ～♪」とするともう１回のリクエスト。何度もうたい次は「はだかんぼ体操」「むすんでひらいて」「かえるのうた」を何度も楽しんだ。朝はいつも噛み付きがないか、ドキドキしていたので、今日みたいに思いっきり楽しんで遊べたのは貴重な時間。イライラする気にもならないぐらい遊びを楽しんでいけたらいいなと思った。
10 月 24 日	〈シャンプー屋さん〉 大きい三輪車にユイさん、カホさん、アヤカさんの三人で座っていた。アヤカさんがその場を離れるとイチロウくんが座った。が、“そこはアヤカちゃんのところだからどいて”とばかりにカホさんに髪をもみくちゃにされ戻ってきて、アヤカさんにも髪をいじられる。そこで丹沢さん（保育士）が「頭ゴシゴシ」と声を掛けると途端に「シャンプーでーす」とカホさんがシャンプー屋さんになりきる。アヤカさんもシャンプー屋さんに大変身。それからしばらくシャンプー屋さんごっこが続き三人で楽しい時を過ごしていた。おとなの声かけ一つで雰囲気も変わり遊びへと発展するんだなと思った。
2 月 6 日	〈お医者さんごっこ〉 膝の上に寝転んだユイちゃんに「お熱ですか？」と聞くとユイちゃんも患者さんになりきる。側にいたスズちゃんに「お薬お願いします！」と言うと、ペットボトルを取りに行き、布団をかけてあげる。頭には「冷えピタね」と布をつけると、モトコちゃんマサトくんもやってきてユイちゃんをトントンと優しく寝かしてあげる。元気になったユイちゃんが起きると「すずも！」と寝転がる。「お熱測りましょうね」とスプーンを脇に挟んで「ピピ！」と鳴る音をするとマサトくんが目を凝らしてスプーンを見つめ何度か見ている。次々と患者さんになりたい人がやってきたので、椅子を並べて待合室を作ると、すぐにイメージがわかったユイちゃんは「お名前呼んでね」と座り、おて絵本をして、何か読んで待っている。カズキくんチヒロちゃんも参加してお薬を飲ませたり、布団をかけたり忙しく働いている。順番に患者さんになるというのが子どもの中にもあるようで、一人ずつその場に交代して寝るのが面白い。「増田ユイさーん。」と呼ぶとスズちゃんが「はーい。」とニヤニヤ顔でやってきて寝転がる。するとユイちゃんが「すずちゃんママです。」とママ役に変身して面白がる。それぞれの遊びがとても面白いお医者さんごっこでとても盛り上がった。
2 月 8 日	〈“鬼”ごっこ〉 豆まきから鬼の印象が強いみつばち組。昨日もおとなが頭に人差し指の角をつくると鬼になり追いかけっこがはじまった。今日も廊下で６名程でやる。ダンボール箱を衝立にしておとなが「キャー鬼来る！」と隠れると角を頭につけたオサムくんが鬼になってやってくる。ダンボールの衝立に小さくなってみんなで隠れると、反対側では鬼役のオサムくんとカズキくんが同じように小さくなって隠れ、お互いそーっと顔を出し、目が合って大笑いする。「おにはそとー！」と豆を投げるマネをすると逃げていく。カレンちゃんは床に落ちている豆を拾って投げたり、食べるマネをする。何度かやりとりしているとカレンちゃんやカホちゃんが今度は鬼になり、「こわい～！」とおとなに抱きつくオサムくんやチヒロちゃん。ダンボールがあることで、こっちなら安全、こっちは鬼になる人と別れられるので、おとなが鬼にならなくても子どもで楽しめる。鬼ブームはしばらく続きそうだ。たっぷり楽しみたい。

5 月 18 日のエピソードは、転んでしまった子に保育士がブロックのお薬を飲ませて、ごっこ遊びが始まる。本来なら転んで気分を損ねるところが、保育士の遊びごころで、大笑いとなる。この保育士と子どものやりとりは、他の子どもたちにも広がり、翌日には、子どもだけで遊びが開始される。イメージが豊かになってきた子どもたちをごっこ遊びの世界に誘う時の保育士のちょっとした関わりが光るエピソードである。

10月24日のエピソードも子どもの気分を変え、楽しいごっこ遊びにしていくという点で、5月18日のエピソードと類似している。このエピソードは、席の取り合いからトラブルになるはずの場面である。ところが、保育士の「頭ゴシゴシ」の機転で、シャンプー屋が始まるのである。この転換は、子どもの表象の力と普段からのごっこ遊びの経験がなければ成立しない。保育士は、普段の子どもたちとイメージ遊びを共有しているからこそ、このような関わりが出来たと考えられる。

6月16日のエピソードは、保育士が一人の子どもの遊びを他の子どもが注目ししていることに気付き、道具を出すことで、多くの子が一緒に楽しむことのできる遊びになった場面である。このように、子どもの関心を敏感に感じ取り、イメージを共有したり、遊びが広がるように道具を使う工夫が光るエピソードである。

2月6日のエピソードは、「膝の上に寝転んだユイちゃんに『お熱ですか？』と聞くとユイちゃんも患者さんになりきる」という記述から、保育士の投げかけたイメージに子どもが合わせることで、ごっこ遊びが始まる。そして、周囲の子どもたちもすぐにそのイメージを共有し、保育士の「お薬お願いします」の声かけに応じてペットボトルを取りに行ったりする。保育士の一言で、ごっこ遊びの場面が共有されていることから、このようなごっこ遊びが、普段から子どもと保育士との間で行われていることが想像できる。そして、保育士は、子どものイメージを継続するために、待合室の椅子を並べるなど、道具を使いながら遊びとイメージを広げていく。

このエピソードは、1歳児クラスの終わりの時期のものであり、ほとんどの子どもが2歳になっているとはいえ、まだ、1歳児クラスである。保育士たちは、このクラスを1歳児とは思えないほど、ごっこ遊びが盛んなクラスだったと振り返っているが、子どもの関心や発達の状態をさぐりながら保育士が遊びのきっかけを作ったり、広げたりすることがわかる。「それぞれの遊びがとても面白いお医者さんごっこ」の記述のように、遊びの楽しみ方、理解の度合いは、子どもによって異なるが、お医者さんごっこという場を共有し、それぞれの表象力に合わせて参加できるような遊びが展開されている。

2月8日の鬼ごっこのエピソードは、豆まきの行事から鬼ごっこが子どもの間でブームになり、段ボールを使ったダイナミックな遊びが展開されている。衝立という道具を上手く使うことで、自然に子どもの役割が交代し、子どもだけで遊びが展開されていくことに保育士が気づいている。

(4) 子どもから始まった遊びを広げる

ミツバチぐみには、子どもたちの間で日々様々な遊びが生まれているが、そのままでは遊びはすぐに色あせ、消えていく。そこに、保育士がちょっと関わることで、遊びは継続し、もっと魅力的なものになる。その様子が、表5のピソードのなかに見ることができる。

8月17日は、園庭のスプリンクラーの水しぶきに関心があっても怖くて近寄れない子どもの様子をみて、保育士がスプリンクラーの周りを走り始める。つられて、怖がっていた子どもが水にぬれながら走り出し、他の子どもたちと一緒になってみんなで思い切り走り回るエピソードである。ことばをかけたり、手を差し出して誘導するのではなく、保育士が思い切り楽しんで見せることで、子どもたちは安心し、その楽しさのなかに引き込まれていく。遊びの輪が広がっていくときの、一つの形だといえよう。

それとは対照的に、10月3日は、子どもが始めた表現遊びに大人が共感し積極的に支持することで、同調的に子どもの間に遊びが広がっていく。子どもは、大人の支持のもとで、のびのびと表現する楽しさを経験し、保育士は子どもの成長に喜びを感じている。見せる―見るという関係のなかで共感的な世界が広がっている。

10月4日は、子どもが地面に蚊取り線香の模様を描いた場面をとらえて、保育士は、「はっぱがぼとん」と、子どものお気に入りの絵本のセリフを唱えながら、「○○くんのぼうしがぼとん」「○○ちゃんのぼうしがぼとん」と言葉を楽しむ遊びにする。言葉とイメージの世界を子どもとともに楽しむ心地よさが伝わってくる。言葉の面白さがイメージと結びつき、やりとり遊びとして保育士と子どもたちの間に楽しさが共有されている。

3月8日のエピソードも同様に、保育士は子どものイメージの世界に入り込み、その世界を楽しみながら、もっと楽しくしようと子どもをリードしていく。「子どもの言葉を拾ってイメージを広げながら一緒に楽しむ雰囲気っていいなと思う」という保育士の考察から、保育士自身がその雰囲気を心地良いと感じていることが読み取れる。

(5) 子どものやり取りを支える

1歳児は、自我が芽生え、「自分」が飛躍的に拡大していく時期である。自我の成長とともに、目に映るもの、身の回りのものすべてを自分のものにしようとする姿がよくみられる。「自分の！」とよくばりな姿を見せる子どもたちのなかで、子ども同士のものの取り合いが始まる。また、ことばの発達が未熟な時期であるため、手がでたり、かみつきが出始めトラブルが絶えなくなっ

表５　子ども達同士の遊びを保育者が遊びを広げる

8 月 17 日	〈こわいけど楽しい！〉 庭にスプリンクラーがあり、興味を持つ子どもたち。遠くからでも風に乗って水しぶきが飛んでくるので、近付きたいけどちょっとこわい。遠くの方から手を伸ばすオサムくんや気になるけど近づけないカエラさんなどいろんな姿があった。そんな中、大はしゃぎで濡れることを楽しむアヤナさんの姿がとても楽しそう。カズキくんは「こわい・・」と言ってまわりで観察。そこで半田さん（担任）がまわりを走り出すと一緒にアカリさんが走り、カズキくんもついていき楽しくなってきた。手を上げ下げして盛り上がり、服もびしょ濡れになって楽しめていた。おとなが一緒にやることでやってみようと思い、楽しい経験がひとつできたんだなと嬉しく思う。
10 月 3 日	〈みつばち合唱〉 木製の椅子を並べて座り、カエラちゃん、スズちゃん、ユイちゃんが『チュウリップ』を歌い始める。歌詞を全部覚えていてとても上手に歌う様子におとなが拍手して盛り上げる。するとチヒロちゃん、アキラくん、イチロウくんも椅子を持ってきて横に並べて合唱が始まった。歌詞を覚えていないチヒロちゃん、スズちゃんもまわりの言葉を聞いてそれとなく歌っている姿がかわいい。最近こうやって子どもが始めた遊びがまわりの子に伝わってみんなで楽しむ場面が増えてきた。おとなが遊びを設定するだけでなく、子どもから始まる遊びが面白いなと思う。見守りながら、時には橋渡しして楽しいやりとりを重ねてもらいたい。
10 月 4 日	〈かとりせんこう〉 お部屋で“かとりせんこう”の絵本を読んでいて、「ポトン！」というセリフは印象にあるようだ。庭でアキラくんがシャベルで砂に線を描き、その型を「かとりせんこうだ！」と教えてくれる。そこで島津が「けむりもんもん。葉っぱがぽとん」と落ち葉を落とす。次に、「しーさんのぼうしもぽとん！」と落とすと大笑いのアキラくんとリンさん。じゃあ次はもっと大きいのを作ろう！と砂に大きく描くと、「あきくんのぼうしぽとん」「リンちゃんもぽとん」と帽子を落とし、みんなも体をまげてぽとんと落ちる様子を表現して楽しんだ。絵本の世界を友だちやおとなと一緒に楽しめるっていいなと思い、たっぷりイメージの世界を味わいたい。
3 月 8 日	〈何が入ってるかな？〉 バケツに砂と葉っぱを入れてご飯作りをしていたユイさん。「できたよ～食べて！」と大人の所へ持ってくる。大人が食べようとすると嬉しそうに「パンも入ってるよ！」「イチゴも入ってるよ！」と教えてくれる。側にいたスズさんとリンさんと「えー！やったね！」と話していると「しーさんも入ってるよ！」と笑う。「しーさんパン？」と面白がるスズさん。そこで島津がシャベルですくうと葉っぱが出てきたので、そーっと引っぱり「あったあった！しーさんパン！」というと大笑い。次は「ママもいた！」、大きな葉っぱを引っぱると「パパだ！」「おじいさんだ！」と葉っぱを見つける度に盛り上がる。最近、大人や子ども同士との会話から、ちょっと面白い表現をして笑うやりとりが増えたように思う。子どもの言葉を拾ってイメージを広げながら一緒に楽しむ雰囲気っていいなと思う。おしゃべりをたっぷり楽しみたい。

ていく時期でもある。以下は、５月のある日の朝のエピソードである。

> カエラさんのイライラする姿が目に何度も見られる。今日も登園時は毛糸にストローを通したものを持参。「ジャーンプ！」と言って瞳もキラキラしていた。しかし、8 時 30 分をすぎ、子どもたちが揃ってくるとバック３枚？（それ以上）、ぬいぐるみを２体、布団１枚を抱え込み表情にも余裕がなくなっていく。声にもイライラ感があらわれている程。母親も家で友だちと関わる時にそのような姿を目にすることもあるという。・・（以下省略）

ミツバチぐみでは、４月の当初からそのようなトラブルが絶えなかった。心地よい子ども同士の関係を作るために、保育士は日々奮闘していた。表６は、そのような日々のなかで、保育士たちがどのように子ども同士の関係を作っていったのかを探るために、貸し借りの場面を取り上げ、保育士がどのように子どもとかかわり、子ども同士の関係が変化していくのかを見ていく。

表６の５月 31 日は、三輪車の取り合いの場面に保育士が関わっていくエピソードである。「かして～」では、貸してもらえず、保育士が入り、「使いたかったの？じゃあカエラちゃんが使い終わったら貸してもらう？」と子どもの欲しい気持ちを受け止め、「終わったら次貸してね」と相手の子に伝えている。結局、その場では貸してもらえず、子どもの気持ちはおさまらないまま、別の対応をとることになった。

しかし、ここで注目したいのが、三輪車に乗っている子に、保育士が「終わったら貸して」と声をかけて、その子の今の遊びを保障し、時間の余裕を与えていること、また、要求している子に、少し待てば乗ることがで

表6　保育者の関わり「貸して」のやりとり

5月31日	〈あの三輪車が使いたいの！！〉 　何人かの子たちが三輪車に乗ったり、途中でおりてままごとしたりしながら遊んでいた。そこでユイさんが乗ろうと思っていた三輪車にカエラさんが先に乗っていた。「かして～！！」と必死にアピールするが、カエラさんもゆずらずにどんどん進んでいく。おとなが間に入って「使いたかったの？じゃあカエラちゃんが使い終わったら貸してもらう？」「終わったら次貸してね」とそれぞれに伝えるが、ユイさんの気持ちはおさまらない。そこで同じ型の三輪車を発見し、「あったよ～！」と伝え取りに向かうが、やっぱりカエラさんの乗っていたあの三輪車が欲しくてまた戻っていく。以前なら「えっ、あった～？！」と気分が変わることも多かったのに、今日はどうしても揺るがない気持ちがあった。その必死さに、カエラさんも余計に貸すことができず、最後は別の遊びに誘うことで気分を変えることになった。最近こんなやりとりが増え、自分の気持ちを強く主張する姿がある。おとなには同じものならいいじゃないかとおもってしまうけど、そうではなく、気持ちの問題なんだなと感じる。こんな風にどうしてもあの三輪車がいい！という強い気持ちも大切にして受け止めていきたいなと思った。
7月25日	〈絵本をめぐって〉 ・朝、登園してくるとカエラちゃんの持っていた絵本を無理やり取ってしまったアカリちゃん。カエラちゃんは突然取られてしまったことに大泣きになる。そこでおとなが、「今はカエラちゃんが使ってたよ。アカリちゃんも欲しいの？」「貸してって言ってみる？」と色々言葉をかけるが、絵本を抱えて逃げようとする。「カエラちゃん悲しい気持ちみたいだよ。泣いてるね。」と話すと、気付いたようで、絵本を返して「カエラちゃんごめんね」「ごめんね」と背中を叩いて慰めている。 ・お昼寝時、アカリちゃんがそれまで手にしていた絵本を置いた隙にイチロウくんが手を伸ばそうとして「あーちゃんの！」と、持っていってしまう。「（僕も）欲しかったー！」と大泣きするイチロウくんがアカリちゃんに近寄ってアピールする。対応してくれた岩本さんが「これはアカリちゃんが使ってるよ」と言われて布団へ戻されるとまたまた大泣きに。そこで、「イチロウくんも使いたかったの？」と声をかける。「アカリちゃん使ってたみたいだから終わったら貸してもらう？」と話しているとその話を聞いていたアカリちゃんが、「どうぞ！」とすぐに貸してくれた。おとながそれぞれの気持ちを言葉に替えることで相手の思いに気付くことができるんだなと改めて感じ、アカリちゃんのおとなの言葉を聞いて行動する姿に嬉しく思う。
10月18日	〈リンさんの気持ち〉 　物の取り合いや友だちとのやりとりの中で、自分の思いが通らなかったり、うまく物事が進まない状況になると気持ちが折れて大泣きすることの多いリンちゃん。おとながフォローしたり友だちが慰めようと近づくと自分の思いでいっぱいになり「ダメダメ‼」とパニックになってしまう。今日は新しい押し車が使いたくて手を伸ばすと側からリョウくんに「使っているからダメ！」と言われてしまう。大泣きで島津の所へやってきて悲しい気持ちをアピールする。そこで「どうしたの？」と聞くと「ママがいい～‼」と言う。 「ママがいいのはわかったよ。でもどうして泣いているの？リンちゃんは違うことで泣いていたんじゃないの?」とゆっくり話す。すると、「リンちゃん使いたかったの」と自分の気持ちをはっきりと伝えた。一緒にリョウちゃんの所へ行って「使いたい」と自分の言葉で言えた。 「ダメだよ！」と言われてまた泣きそうになり、おとなが「じゃあ終わったら次貸して！待ってるね」と声を掛けお互い納得したようだった。しばらくして押し車を貸してもらえた時はとても嬉しそうだった。うまくいかないことがあると大泣きしてぐちゃぐちゃになって“悲しい”という気持ちでいっぱいになってしまうリンちゃん。今日ははっきりとごまかさずに伝えてくれた。その気持ちを嬉しく思った。
2月9日	〈かして〉 目に入った物が欲しくて次々と友だちの使っているおもちゃを手にしようとするオサムくん。朝はカズキくんの読んでいた絵本が欲しくてパッと取ろうとする。 「これは今カズキくんが読んでるよ。“貸して”って聞いてみた？」と聞くと欲しい思いでいっぱいのオサムくんは「やだ！」とおとなが色々と声をかけるが納得出来ない。　ようやくおとなと一緒に「かしてっ！」と言うと「ダメー」と言われてしまう。　そこでおとなが「ありゃりゃ、がーん」とちょっとふざけて悲しい気持ちをアピールする（頭に手をのせてがっかりポーズ付き）。するとオサムくんも面白がって「がーん」とポーズ。するとカズキくんも面白がり、何度かやっていると貸してくれた。そこで今度はカズキくんも「がーん」のポーズがしたくて、同じように「かしてっ！」と聞く。答えは「やだ」「がーん」と言ってポーズするカズキくん。そのやりとりが楽しくなって終わったが、オサムくんは貸すまでの余裕がなかった。今週はそんなやりとりが何度も起きている。相手の気持ちにも気付いているオサムくんだが、まだまだ自分の思いでいっぱいになってしまう。積み重ねていきたい。

きるという、見通しを持って待つことを促していることである。言い換えると、期待しながら待つことを促している。

ものの取り合い場面で、「かして」「いいよ」の貸し借りのパターン化したやりとりを教え込むのではなく、双方の想いを尊重し、両者に考える時間を保障している。遊んでいる子どもにとっては、無理やりとられるという不安な気持ちにならず、相手の想いに気付き、自分の気持ちを切り替えていく貴重な時間となろう。また、待つ子にとっても、自分の思いを持ち続け実現する経験となり、粘り強く自分の思いを実現していく力の基礎を培うことになろう。何よりも、両者ともに自分が大事にされているという感覚をもつことになる。

保育士に支えられながらこのようなやりとりをこれまで積み重ねてきた子どもたちである。7 月 25 日、10 月 18 日のエピソードから、そのようなやりとりが徐々に定着してきたことが読み取れる。

10 月 18 日のエピソードでは、加えて、自分の気持ちを言葉にすること、そして、相手に伝えることを保育士が支援している。「リンちゃん使いたかったの」と自分の気持ちを言葉で表現し、一緒にリョウちゃんの所へ行って「使いたい」と自分の言葉で伝えたことを保育士は、評価し、うれしく思っている。

貸し借りのトラブルの原因は、一方的な要求であるが、その要求を持つこと自体は重要なことであり、子どもの成長のあかしでもある。「終わったら貸して」のやり取りのサポートは、ものを得るための技術を教えるではなく、自分の思いを明確に持ち、どうすれば相手に自分の思いが伝わるのかを子どもが学んでいくためのサポートであり、いいかえると、子どもたちの良い関係を育てるためのものだといえよう。

ところで、自分の思いを伝えても、そう簡単に相手に受け入れられるわけではない。そんな膠着したやりとりを、保育士が、楽しいやりとり遊びに変えたのが２月９日のエピソードである。「ダメ！」に対して「ありゃりゃ、ガーン」と頭を抱えるポーズをとることで、トラブルは、楽しいやりとり遊びに変わっていく。楽しく、心地よい関係を作っていこうとする保育士の意識の現れといえよう。

4. 実践知についての考察

保育士と子どもの対話が豊かに含まれる１年間の保育エピソードを、食事、午睡、遊び、トラブルにかかわる貸し借り場面、及び、新しい生活が始まる新学期のエピソードに分け、保育士と子どものなかで豊かな対話が生まれるとき保育士が具体的にどのような関わりをしているのかに焦点をあてて考察を行った。ここでは、それらの考察から見えてきた、保育士の保育行動の背景にある実践知を探る。

(1) 保育士のひらめき：きっかけを逃さない目

多くのエピソードの中に、変化の瞬間があり、保育士がその瞬間をとらえていることがわかる。

たとえば、表１の新学期の場面では、４月５日、21 日、26 日にきっかけをみることができる。４月５日では、３行目の「そこで」の部分である。子どもの関心が集まった瞬間をとらえて、集団の活動として遊びを広げている。21 日では、偶然アキラ君がやってきたのを切りかえの好機ととらえて、保育士の楽しいやりとりを見せることで、間接的にユイさんの気分を変える仕掛けをしている。26 日は、９行目の「おっ！これは気分が変わったぞ」の部分である。自分が１対１でかかわるより、子どもに任せた方がうまくいくという判断を瞬時にしていることがわかる。

ごっこ遊びの場面では、保育士のひらめきと即興で遊びを広げていく場面が多く見られる。表４の５月 18 日のエピソードでは、転んだ子に薬（ブロック）を飲ませ、ごっこ遊びが展開する。10 月 24 日では、席の取り合いで、髪の毛をぐしゃぐしゃにされてしまった子に声をかけて、シャンプー屋が始まり楽しい遊びとなる。

２月６日のエピソードでは、保育士のひざの上に寝転んできた子どもに一声かけることで、お医者さんごっこが展開する。いずれのごっこ遊びも周りの子どもたちを巻き込んでにぎやかな楽しい遊びになっていった。

変化の瞬間は、表１の４月５日のエピソードにもあるように「そこで」という言葉で表されていることが多い。表５の保育士が遊びを広げるエピソードでは、８月 17 日、10 月４日、３月８日に「そこで」が使われている。表６の貸し借りの援助の場面でも、すべてのエピソードに「そこで」が出てくる。表６の２月９日のエピソードでは、「貸して」に対して「ダメ―！」と言われてがっかりする瞬間をとらえて、保育士が「ガーン」という遊びに転換して、その場の空気を一転させる。このように、「そこで」は、保育士が、「今だ」と転機をとらえた瞬間である。そこには、いくつかのパターンが見られる。

一つ目は、遊びを楽しく、ダイナミックに広げていく瞬間、２つ目は、子ども同士の行き詰った関係を変えていくとき、３つ目は、子ども自身の状態を変えるときである。

これらは、保育士が介入する場面であるが、保育士

は、そのタイミングをのがさず、周囲の状況や周囲の子どもたちの気持ちを利用しながら、場面を変えていくのである。

表5の10月4日と3月8日のエピソードに注目してみると、「そこで」の直前に、保育士は、子どもがイメージの世界に入りこんでいることに気付く。そして、その瞬間をとらえて、保育士自らその世界に入り込み、もっと楽しい世界に広げていくのである。この展開は、最初から保育士が意図したことではなく、子どもの今をとらえ、こうすればもっと遊びが楽しく豊かになるだろうと考える保育士の直観に支えられている。

加藤（2007）は、子どもの要求・願いを読みとる目と耳を持ちながら、活動をもっと面白くしたいと考える子どもの願いと活動を面白く発展させようとする保育士の「ひらめき」がうまく響きあっているとき、保育士―子ども関係は対話的になることが可能であると述べている。

「今だ」という直観は、まさに、加藤の言う「ひらめき」にあたる。そして、このひらめきの源は、日々の生活の中で、保育士が子どもとのかかわりを通して、あるいは、保育の経験を通して磨いてきたものであろう。エピソードの保育士の考察からは、子どもの変化を喜び、明日につなげようとする保育士の想いが読み取れる。子どもの昨日までの姿を知り、明日の姿を期待しながら、自分自身も楽しみ、子どもと自分の今を充実させようとするとき、実践知としての「ひらめき」が生まれてくるのであろう。

(2) 遊びごころのある柔軟な姿勢とゆとり

食事と午睡のエピソードでは、1日の中でも極めて重要な生活の場面を心地よい空間、心地よい時間にしたいという思いが共通している。

表2の9月15日の味見のエピソードは、遊びの延長のように、みんなで味見をして楽しむ場面である。食への興味を重視し、食べ方にはこだわらない保育士の柔軟な姿勢と遊びごころが伝わってくる。子どもが食べ物に興味を持って、つい食べてしまう仕掛けは、この柔軟な姿勢から生まれているといえよう。

午睡の場面のおしゃべりからも、保育士の柔軟さが読み取れる。午睡のときは、みんな静かにするという暗黙のルールにとらわれず、心地よい時間となるように、おしゃべりをしながら子どもとのゆったりとした時間を持つことを重視している。このような心地よくゆったりとした時間が子どもと保育士との対話を生みだしていくといえよう。そして、この柔軟性こそが、実践知を生み出していく土壌となるのであろう。

(3) 保育の楽しさを求める姿勢

どのエピソードにも共通しているのが、子どもとの対話を自らも楽しみ、より心地よいものに、より楽しいものにしようという保育士の姿勢である。その思いは、道具を使う、自らがモデルとなって子どもの模倣を誘うなどの行動として、実践の中に立ち現れる。初めから決められた保育士の物語に子どもをはめ込んでいくのではなく、子どもとの対話を通して、保育士と子どもの新たな物語を作りあげる過程を、子どもとともに楽しんでいる。このような姿勢が、保育の実践知としてのひらめきをより輝くものにしているといえよう。

謝辞） X園の園長はじめ担任の先生方には、保育エピソードの提供と分析に多大な協力をしていただきました。また、掲載についてご快諾いただきましたことを心より感謝申し上げます。

付記） 本研究は平成24年度科研「基盤研究C課題番号24531020」の一部である。

引用文献

加藤繁美．2007．はじめに．生成発展カリキュラムの理論と実践．加藤繁美著．対話的保育カリキュラム．上．ひとなる書房．pp.101.

加藤繁美．2012．乳児期後．10か月～1歳半．0歳～6歳　心の育ちと対話する保育の本．学研．37.

河原紀子．2004．食事場面における1～2歳児の拒否行動と保育者の対応：相互交渉パターンの分析から．保育学研究．42（2）．pp.8-16.

鯨岡峻．2012．第一章　保育現場とエピソード記述．鯨岡峻著．エピソード記述を読む．東京大学出版会．pp.13-19.

鯨岡峻，鯨岡和子．2007．序章　いま、なぜ保育の場にエピソード記述が必要なのか．鯨岡峻，鯨岡和子著．保育のためのエピソード記述入門．ミネルヴァ書房．pp.1-29.

古賀松香．2011．1歳児保育のむずかしさとは何か．保育学研究.49（3）．pp.8-19.

斎藤多江子．2012．1～2歳児の仲間と物とのかかわり―「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して―．保育学研究．50（2）．pp.6-17.

砂上史子，秋田喜代美，増田時枝（他），箕輪潤子，中坪史典，安見克夫．2012．幼稚園の片付けにおける実践知：戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較．発達心理学研究．23（3）．pp.252-263.

布施佐代子．2006．３歳未満時の人間関係．金田利子，斎藤政子編著．保育内容・人間関係　ミネルヴァ書房．pp.135-138
やまだようこ．2000．Ⅰ人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学．やまだようこ編著．人生を物語る―生成のライフストーリー．ミネルヴァ書房．pp.5.